



賛成できぬと
申しあげたら

今にも手打ちの
勢い…

マ意見を
きかせてください
栗山殿

皇室のことは
あなたが
一番よく
ご存知だ

もうお考えは
決まっておられるの
でしょう

天皇の名は皇位継承者だけに
与られるもので、皇位につい
たことのない典仁親王に太上
天皇の尊号を贈ることはまち
がいであるとはつきり兄は述
べた。

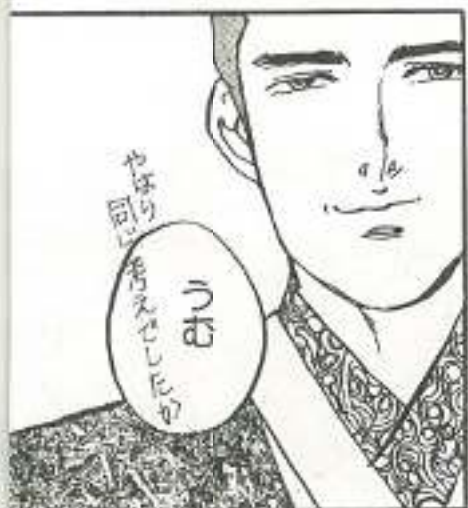
認めれば
いずれ世の乱れ
を招くやも
しれません

將軍様の
お父君のこと
についても同じこと

大義名分を
重んずる朱子学に
てらしても
賛成できません


京都におわす
天皇様であられても
將軍様であらうとも

非は非と
お伝えすることが
正しい筋道と存じます

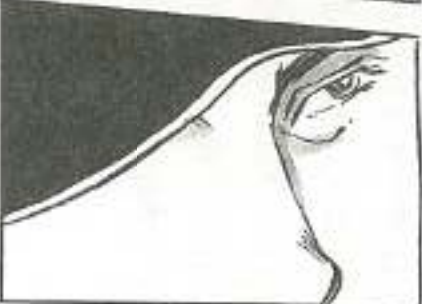


ごむ


やばり
同じ
お考えでしたか




三月十二日に異国の船
が姿を見せた。
將軍様は海岸の巡視を
命じられて四月定信
様は伊豆・房総の巡
視に出むかれた。



—そして七月、巡視
からもとられた定信様
は將軍様より老中職を
解任されたのだ。



尊号を贈ること
は、ついに中止と
なった。



將軍様の父君に大御所
の尊名を贈ることで、き
びしく反対したことが
まだ尾を引いていたの
だろうか。



そんな



先生の助言が
なければ改革など
とても手もつけれ
なかつた

いいえ
私など



定信様つ

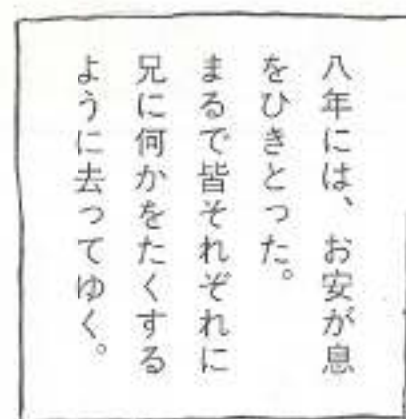


もう
私が居なくても
大丈夫だ

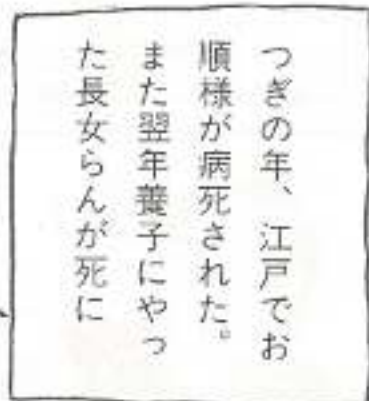
先生のご活躍を
きくのを楽しみに
しております

では先生

兄が幕府儒官としてまた歩
き出せたのは、定信様に出
逢えたからだ。
まるで二人三脚するように
仕事をしてきたのに――
残念だな。



八年には、お安が息
をひきとった。
まるで皆それぞれに
兄に何かをたくする
ように去ってゆく。



つぎの年、江戸でお
順様が病死された。
また翌年養子にやっ
た長女らんが死に



昌平校は学問
したい人 皆のための
学問所なのに 今や

林さんちだけの
学問所じゃない
ですかつ

まあまあ
落ちついて

古賀さんつ
ご意見は？

どうにかしてね

定信様が退かれた後も幕府
内の学問は朱子学でつらぬ
かれた。兄、柴野栗山、古
賀精里様、岡田寒泉様の三
人が中心になった。後に尾
藤二洲様もその名を加える。



まったく

栗山先生は
聞き上手と
言うか

がまん強いのやうか

あの方は
いつだって自分より
他人のことを気に
かけておられる



この「寛政の三博士」のほか
にも、頼春水様や、林述斎様
も昌平校の改革には大いに
力をつくされ、当時林家の
私塾のようになっていた昌
平校も、本来の「学問所」の
姿にもどりつつあった。



述斎さあん

春水さんつ
今あきます
よつ



前に
一度先生に
聞いたことが
あるんです

先生ほどの
りっぱなご意見
を持つた方が
なぜ本を
書かれない
のですか？
つてね

先生は
何と？

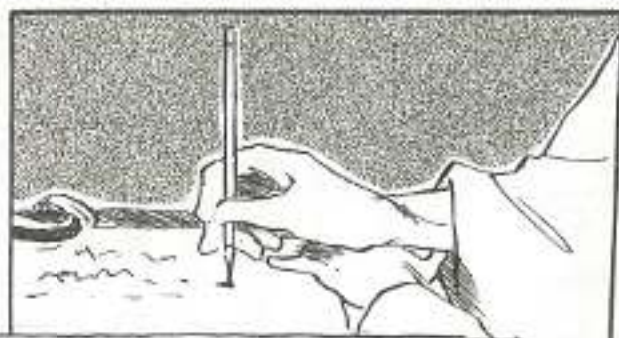


本を書くのは
人に役立てるための
もので

私みたいにな
つまらない学者が
いいかげんに本を
書くと

かえつて人の害に
なるからね

——だ
そうです



しかし兄の想いは遠く蝦夷の地にあった、以前よりさわがれていた海防について、兄は心を砕いていたから、有名な兵学者、平山行蔵様にお話をしたいと、何度も手紙で伝えた。



寛政九（一七九七）年十月十二日、兄は昌平校での講義の任を解かれ、將軍様のご嫡男家慶様の侍講となった。兄は他人との交渉を禁じられ、特別許された人達しか兄に会うことはできなくなつた。



ふん
儒学者ふせいに
何がわかる



おんつ

しかし平山様は、何かと理由をつけられて、兄の申し出を断ってこられた。
お役目のために身動きのとれない兄は、ただ平山様が動いてくださるのを待つしかなかった。

伊豆・熱海



先生
いかがです

手ざわりが
良くなった
ござう

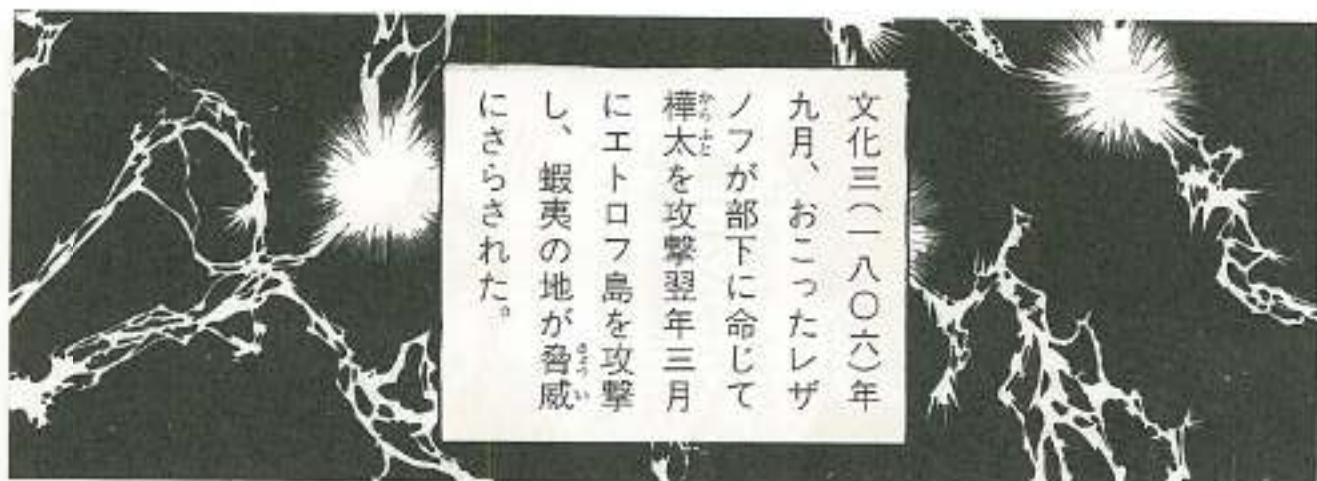
半太夫さん
この雁皮紙を

江戸本町に
店を出して
大いに売りました

文化二(一八〇五)年朝鮮からの使者の接待を対馬ですることが決まった。兄はこの相談を受けたとき「日本の權威をそこなわぬようせめて北九州あたりで」と主張したのだがいれられなかった。

その上、去年の九月から長崎にロシアの使者レザノフが幕府からの交易許可の返事をまっけている。幕府では彼等の対応に困りはてていた。

翌年三月、ついに幕府は交易の許可を出さなかった。
ロシアの使者を半年もまたせうえの答えだった。



文化三（一八〇六）年
九月、おこったレザ
ノフが部下に命じて
樺太を攻撃翌年三月
にエトロフ島を攻撃
し、蝦夷の地が脅威
にさらされた。



はじめてお手紙を
差しあげてから…
…八年近くなり
ますね

ロシアが蝦夷地
をおびやかすことは
十年前からわかつて
いました

四月
平山行蔵様が
腰をあげた。



もつとはやく
お出でいただけな
かったのが残念です



自分に武芸のこころえが
あれば、兄自身、先頭に
立って蝦夷の皆に武芸を
教えて防御の備えをした
いとまで、兄は平山様に
語った。

兄の熱意は
さめることがない。



おつれ
しました





この一大事に
この命を
つかわずして
どうしましょう

私のような
百姓の子が

ここまでに成れたのも
お国が召し出して
くださったからです

私は
そのお恩に
おむきたいのです
それが今だと



旗本達とまたう
ご恩も
忘れて
イヤな
ことから
逃げてばかり
腰ぬけです

いゃー
先生は
えらいっ

すごいからだ
しんがいた
武士以上に
お考えの
もつていね



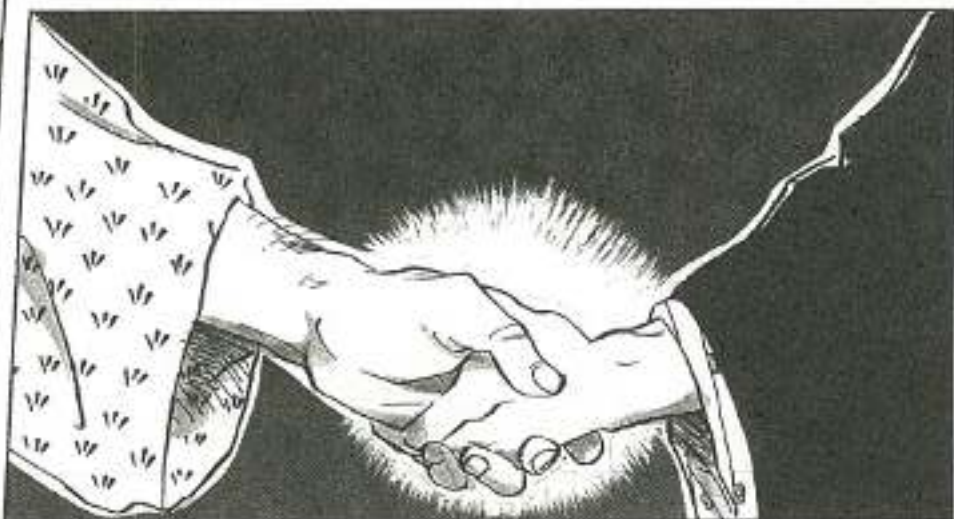
では先生つ
来年の春に!!



この方は
実力だけでここまで
こられたのだな...



ひとつ
旗本たちの
鼻を
あかして
やりましょう
行蔵さん



文化四(一八〇七)年
五月に兄は允升
(碧海)と、門下生三
上君といっしょに但
馬の城崎に湯治に向
かった。

「一度天の橋立てを見に行くといい」——生前父が旅の思い出をなつかしそうに話していた。兄にとってそれは父の遺言だったのだ。

養父さんほんつとに大丈夫？

ゲッゴホッゴホッ

お前さんの話聞いておれやうか

宿の近くにあった赤石の洞窟を見てこれを「玄武洞」と名づけた。
七月二十三日江戸へ帰ってくるとまもなく病床についた。

允升(碧海)は阿波の儒官になつたし

允常(方閑)も幕府に仕えたし

旅の間もせきがひどく歩くのも苦しうだった。それをこらえてまで城崎へ行ったのは、兄はきつとずい分と前から最後の日を知っていたのだ。

…うまくことまつてるや

あたり前だつ私が育てたんだぞつ

だあれも医者にはなつてくれないんだ